
BLEACH 死神編

深月姫季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L E A C H 死神編

【Nコード】

N 5 7 1 3 M

【作者名】

深月姫季

【あらすじ】

突如流魂街に送られた魂。その魂魄が放つ強い霊圧を察知したルキアと恋次は現場に向かい、それが黒崎一護であることを確認する。一護が死んだ事実に啞然とする二人。だが、そこに現れた人物の助言により一護の死を調べると、驚くべき事実が明らかに……。

完結してから読んで頂くのがお勧めです。

其の一、ざわめき

その日、嫌な予感がルキアの頭の中を支配していた。自らが所属する十三番隊を抜け出し、六番隊まで駆けて行く。

すると途中で見慣れた赤いパイナップル頭の男とぶつかりそうになった。

「危ねーだろ！どこの所属だ、ってルキアじゃねーか」

「たわけ恋次、前方不注意は貴様も同じだ。だがちょうど良かった」

幼馴染みの阿散井恋次は六番隊副隊長でもある。

「ひとつ聞きたいのだが、何か変わったことはなかったか？」

勢い込んで尋ねるルキアに、恋次は気圧され一歩退いた。

「変わったこと……だと？」

「ああ……朝から胸がこうザワザワと……解せぬのだ」

いつになく真剣な様子に恋次も顔を引き締めた。

「物騒だぜ……何か起きるってのか？」

「わからぬ……虚の気配ではないが何か不思議な霊圧を微かに感じるのだ」

恋次は目を閉じ、感覚を研ぎ澄ました。霊圧感知に長けているわ

けではないが、ルキアの言葉通り、不思議な霊圧を察知した。そして背後の強力な霊圧も……。

「あれ、朽木隊長の霊圧、感じねえか？」

答えを待つより早く、背後で耳慣れた声がして二人は振り向いた。

「ルキア、恋次」

「兄様！」

「朽木隊長、どうしたんすか？」

「兄らも感じたのだろう……」

隊首羽織には『六』の文字。ルキアの義兄であり恋次には直属の上司にあたる、朽木白哉の姿が其処にあった。

「兄様も？」

「造作もない。強力な霊圧の持ち主の魂が流魂街に送られた。場所を捕捉し、お前達が行け」

恋次は白哉の顔が少し翳ったのに気づいた。

「現世で死んだ魂ってことならわざわざ死神が行くことはないんじゃないですか、朽木隊長。そいつに何かあるんすか？」

白哉は躊躇っていた。そんな姿を滅多に見せるような人物ではない。

「行けば解るだろう」

二人が瞬歩で消える瞬間、白哉は誰に言っても知らず呟いた。

「よもや黒崎一護が死んだとは思うまい…だがあの霊圧は確かに…」

…」

其の二、記憶を失った男

北流魂街80地区「更木」

すれ違ったホームレス風の老人に聞いた話だと、治安はすこぶる悪いらしい。その証言を裏付けるように各地で闘争が繰り広げられている。人は人というよりは獣じみている印象だ。

その喧騒から逃れるように、少年は森に身を隠した。酷く空腹だが、食べ物を手に入れることすらままならないらしい。

それに、少年には考えるべきことがたくさんあった。

ここがどこであるのか。少なくとも初めて見る気がした。人が着ている服も着物や洋装、どれもアンバランスで、違和感を与えた。

そして自分が何者であるのか。断片的なビジョンが激しい頭痛と共に入り込んでくる。それは周波数の合わないラジオのように、少年の耳をすり抜けて行く。

「オレは、死んだんだよな？」

最後の記憶はおぼろげだが自信がある。暴走車にはねられそうになっている黒髪と茶髪の双子。思わず飛び出して二人を庇い、突き飛ばした。二人が何かを語りかけてきた気がするが、いまの少年には思い出せなかった。

とすると、ここは死後の世界という奴だろうか。初めて見るのに懐かしいような不思議な空気。息もしやすい気がした。

その時、背後の草むらがカサカサと音を立てたかと思うと、飛びつきり不思議な服装をした二人の男女が自分を見下ろしていた。

「……まさか、一護、何でこんな所に」

黒い死装束のようなものを着た黒髪の女が大きな瞳を更に見開き、自分に呟くのをまるで他人事のように眺めていた。もう一人は赤い髪の男で、やたらと屈強そうな感じた。

「お前、死んだのか」

「そうらしいな」

ストレートな物言いに、一瞬躊躇いながらも素直に答えた。男女は互いに目を交わしながら、途方に暮れたようにため息をついた。

「なあ、オレのこと、何か知ってんのか？」

男女はギクリとした様子だった。

「記憶を失ってんのか？俺はこんなケース見たことねえぜ」

「私もだ、恋次……」

どうやら男の名は『恋次』というらしい。彼らが自分のことを知っているのなら、自分の名も教えてくれるだろうか？

「二人だけで話してねーで、オレの名を教えてくれ。あんたたちが誰なのかも知ってえ」

女は意を決したように口を開いた。

「私は朽木ルキア。隣の莫迦者が阿散井恋次。職業は死神。そしてお前は

かつて死神代行として共に戦った、黒崎一護だ」

其三、一護の処遇

この男を、この霊圧を見間違うはずが無い。

ルキアは大きくため息をついた。今しがた己の名を聞かされた一護は口の中で其の名を転がし、何かを思い出そうと躍起になっているようにも見えた。

辺りを見回す。北流魂街80地区「更木」は流魂街で最も治安が悪く、恐れられている場所だ。よもやこいつが飛ばされた先がここだとは、運が悪い奴だ。それに最も驚いたのは記憶が無いということだ。本来ならば流魂街に飛ばされた後も過去の記憶は残っているものだ。

「ルキア、心配することねーよ、こいつならここでもやっていけるだろ？強さは俺たちが一番わかってる筈だ」

恋次の慰めに、ルキアは反論した。

「いや、こいつは記憶がない。戦う術も、ここで生きる術も身につけておらぬ」

恋次の目が何か言いたげだった。言いたい事は解る。死神が必要以上に流魂街の住人に接触するのは掟に反する。だが一護は護廷十三隊の恩人である。そしてルキアにとっても。そんな一護をここにおいていくのは躊躇われた。

「護廷十三隊は一護に借りがある。何とか瀟霊廷内に呼べぬものだろうか」

「待て、ルキア……趣味が悪いぜ」

ルキアが呟いた時、恋次が刀を抜いて後ろに向かって投げた。

「恋次？」

「恋次、腕をあげたの」

「気配を消して近づくとは、さすが元隠密機動つスね」

そこには恋次の刀を弄びながら四楓院夜一が微笑んでいた。

「夜一サン、一護を瀟霊廷に連れ帰るのは無理っスよね」

「無理じゃ、今の時点ではな」

にべもない夜一の言葉にルキアは肩を落とした。

「喜助から事情を聞いて、現世から来たのじゃ。既に根回しはすんでおる。じゃが…どうやら記憶を失っておるようじゃの。ならば…一護はこれからしばらく志波家で面倒を見ることになる」

「志波家……空鶴殿が？」

ルキアに向かって夜一が力強く頷いた。

「あやつの鬼道と四楓院家に伝わる秘法で一護の記憶を戻す」

「可能なのですか？」

ルキアが相好を崩した。恋次も驚きつつも笑みをもらしている。

「可能じゃ。だがお前たちには現世へ赴いてもらいたい。一護の死について調べてきて欲しいのじゃ。もちろん白哉と話はついておる」

「一護の死についてですか？」

恋次と顔を見合わせて互いに眉を寄せる。

「表向きは交通事故じゃ。じゃが喜助が違和感を感じておってな。記憶が無いことも異例中の異例。詳しいことは喜助に聞け」

「解りました」

二人の決意は固まっていた。

「よし、良い子じゃ。では行くとするかの」

夜一は目にも留まらぬ速さで一護の腹へ拳を喰らわせ、気絶した一護を背負った。

「十分に用心せよ」

そう言い残すと、夜一は瞬歩で姿を消した。

其の四、現世へ

空座町に降り立った時、ルキアは思わず懐かしさがこみ上げてくるのを感じた。見慣れた街並み、そして幾度と無く一護らと共に駆け回った道。藍染を倒してから全く現世と関わりを持っていなかったから、2年ほどの月日が流れていた。

感傷に浸るルキアを余所に、恋次の行動は素早かった。

「おい、ルキア。俺は浦原さんトコ行って事情聞いてくるから、前はあいつ等の所へ行け」

そうだ、感傷に浸っている暇など無い。

「井上達の所か……気が重いが、解った」

辛い役割だ。他の二人はともかく、井上がどうなっているかは容易く想像がついた。

「夕刻に浦原商店で落ち合ってたのはどうだ？」

「いいだろう。夕刻に！」

二人は地面を蹴り、反対方向へ駆け出した。

何故、一護は死んだのか、何故記憶を失っているのか。疑問点は考えれば考えるほど浮かんでくる。ルキアは既に冷静な思考を取り戻していた。

何かがおかしい。井上織姫がもし一護の霊圧を感知できる場所にいたのなら、直ぐに駆けつけ盾舜六花で救命措置を取れた筈だし、石田や茶渡、特に霊圧探查能力の高い石田がいた場合も直ぐに彼女

に連絡を取ろうとするはずだ。

まずは井上に話を聞こう。ルキアは井上織姫の住むアパートへ向かった。

其の五、悲しみの旋律

「突然で済まぬ」

玄関先で頭を下げたルキアに、織姫は微笑みながら両手をブンブンと振った。

「ううん、会えて嬉しいよ、会いたかったから……朽木さん。久しぶりだね」

入るよう促され、リビングに通され正座する。織姫の目は真っ赤に腫れていた。

無理もない。慕っていた男が急にこの世から消え失せたのだから。ルキアの心に、一護に良く似た上司の姿が思い浮かんだ。

「あ、あのね、朽木さん」

織姫の声が現実に取り戻す。

「黒崎くん、元気？……って、あ、元気って言うのは変か。何だか朽木さんに会って、ビックリしちゃって……言ってること変だよ、あはは」

その瞳に涙が浮かんだかと思うと幾筋も流れ落ち、机の上で弾ける。

ルキアは織姫の横に座り、そっと背中をさすってやった。

「ごめんね、朽木さん……」

「案ずるな、井上。無理して笑わずに時には仲間の前で泣け。それとも私は仲間ではないのか？」

少しおどけて肩を叩くと、織姫は肩を震わせて鳴咽を漏らした。

「あり…がとう」

「突然黒崎くんがいなくなって、教室も何だかいつもと違って、たつきちゃんも無理して笑ってて、石田くんや茶渡くんも沈んで…夢じゃないかって黒崎くんに会いに行っても、夏梨ちゃんも遊子ちゃんもずっと泣いてて。どうして私、あの時黒崎くんの霊圧が消えていくのを解らなかったんだろ…きっと私の力なら助けられたのに」

「……井上、一護の霊圧を感じていなかったのか？」

悔しいのと悲しいのを抑えながら、織姫がルキアを見た。そして大きく息を吸い込むと、ゆっくりと話し出した。

「うん、あの日の学校の放課後、私はたつきちゃんの空手部が終わるのを待ってたから、帰るのが遅くなったの。でも黒崎くんは一番先に学校を出ていったの。何か用事があるみたいで慌ててた。たつきちゃんが呼び止めても気がつかないくらいに」

「私は体育館でたつきちゃんが練習してるのを見た。そうしたら救急車のサイレンが遠くで聞こえて、啓吾くんが学校まで走ってきて、交差点で事故があったって教えてくれたの。でもまさかそれが黒崎くんなんだなんて……」

妙な話だ。

「井上、霊圧を感じなかったのはその時だけか？」

「動揺しててよく覚えてないけど、石田くんや茶渡くんの霊圧は常にかけてた……かも。黒崎くんが教室にいたときはいつも通り黒崎くんの霊圧を感じてた」

思い出したように織姫は言葉を付け足した。器用に霊圧をコントロールする石田と違い、一護は常にその強大な霊圧を垂れ流している。それなのに特に強い霊圧を持つ者のいない空座町で一護の霊圧を見失うこと自体、奇妙だ。

「一護の霊圧が何故読み取れなくなったのか、調べる必要があると思うだな」

何の気なしに呟いたルキアに、織姫はピクリと眉をひそめた。

「それなら、黒崎くんが意図的に消したんじゃない……朽木さん、黒崎くんに聞いてみなかったの？」

ルキアは大きく息を吐き出した。

「聞きたくても、一護は記憶を失っているのだ。それにどうやら一護の死に幾つか疑問点が生じてきたらしい。今恋次は浦原の所で事情を聞いているだろう」

織姫が絶句するのを見ながら、それも無理はないと思った。前例のないことに、ルキアの頭もパンク寸前だ。

「お願い、朽木さん。私にも手伝わせて」

真剣な眼差しに、ルキアはただ頷くしかなかった。

其の六、夜一の提案

「起きろ」

強く揺さぶられて目が覚めた。視界に入っただのは地面。そして周囲は深い森らしく、もう暗くなった空の下で、灯りもなく数メートル先さえ危うい。見上げるとやたらに色黒い女がいる。さっきまで男女とひそひそ話を繰り広げていた女が。どうやらこいつに気絶させられ、片手で担がれここまで連れてこられたらしい。なんて怪力だ。

「ほれ、ブーツとしてないで立て。着いたぞ」

着いた？どこに？色黒の指差す先にはへんてこりんな門構えの家がある。まさかここに入れと言うんじゃないだろうな。

そんなことを考えているのを見透かされたように、色黒はニヤリと笑った。

「ここに入るんじゃ、一護。前にも来たことがあるじゃろう。ほれ、思い出さんか」

「あんたもオレの事知ってるみたいだな……なら詳しく話を聞かせてくれよ」

この奇妙な場所へ来てから知らされたのは、自分が黒崎一護という名前で、死神代行だとかいう耳慣れない言葉だけだ。

中では、と呟き、色黒はお世辞にもセンスがあるとは言えない家に歩いていく。二本の柱が人の腕の形をしている。こんな所にもともな人間が住んでいるのだろうか。

「わしじゃ、開けてくれんかの」

「これはこれは夜一殿、お久しぶりです。どうぞ、中へ」

何やらゴツい双子の男が恭しく頭を下げた。とりとめもない雑談を始めた色黒、もとい夜一とよばれた女をしばらく観察する。双子の方は金彦、銀彦と呼ばれており、この家の門番を仰せつかつているらしい。

「待たせぬ内に行くぞ、一護」

振り向いた夜一にせっつかれ、一護は慌てて二の腕の石柱の間を通り抜ける。其の先は至って普通の玄関かと思いきや、意外にも下り階段が続いている。夜一主導の下、一番大きな和室の前に着くと、中から声がした。

「おう、入れよ夜一」

遠慮も無く勢いよく襖が開かれた。中で胡坐を掻いているのは女性だ。

「こいつは志波空鶴。志波家の長女で儂の昔なじみじゃ」

「よォー護！おっ死んで記憶喪失？情けない話じゃねーか」

片手をあげてカッカカと笑う。見た目とは違い豪快な女性のようだ。

「えーと……」

どう反応していいのか戸惑いながら言葉を紡ごうとする。だがそれを遮ったのは傍観者を決め込んでいた夜一だった。今までのからかうような笑みは消え、真剣な眼差しで真っ直ぐとこちらを見据えている。

「一護、お前は自分の名前を覚えているか」

「……黒崎一護？」

教えられた名前を舌の上で転がす。だがそれが本当に自分だと云う確証は無い。何だか気持ち悪い。

「自分の生前、そして死したときのことを覚えておるか」

その問いは胸に突き刺さった。覚えていることなど何も無い。『更木』という所で目覚めてからの記憶だけだ。

「いや……覚えてねえ」

「普通、死した魂は生前の記憶を保ったまま尸魂界に運ばれる。たまに現世に留まりたいと思い、浮遊している魂を死神が魂葬 現世で言う成仏をさせてやることもある。じゃが記憶を失うということはずない。儂の推測じゃが、一護の死には何か別の力が働いている」

空鶴は黙って夜一の話聞いていた。

「別の力って何だよ……!!」

夜一の説明で少々頭がはつきりしてきたものの、最後の言葉に釈

然としない。

「わからぬ。一護が記憶を取り戻すまでは、な」

「オレの記憶……」

口の中で呟く。自分が誰で、何故死んだのか。生前、自分がどんなことを考えていたのか。

「それを取り戻す方法はあるのか？」

気がついたら口に出ていた。夜一は空鶴と顔を見合わせてニヤリと笑った。

「辛い修行になるが、覚悟はあるか」

覚悟は決まっていた。

「何をするんだ？」

「空鶴と儂で、お前に修行をつける。お前が死神の能力を再び身につけることが出来れば、記憶も取り戻せるはずじゃ」

こうして、一護の厳しい修行の日々が始まった。

其の七、死神

一護が次に連れて行かれたのは、砂と岩ばかりの場所だった。夜一曰く地下練習場とのことだった。殺伐とした視界の片隅に、何故か温泉がある。

「一護、今の自分の姿を見て、思い出すことはないかの」

そう言えば、と自分の身体を見下ろす。薄手の黒い羽織と袴だ。これは確か最初に目にした男女が着ていたのと同じものじゃなかったか。それに腰に違和感を感じて手を当てると、細長い刀に触れた。

「なんか、頼りない刀だな……」

もつと凄い刀を見たことがある気がする。今手にしている浅打は弱々しく見えた。

「それはここに来る途中説明したとおり、下級の死神が差すものだ。隊長格は始解、そして中でも才を持つものは卅解を会得する。以前のお前は卅解も会得していた」

言葉も、言葉の意味も半分以上は飲み込めていなかった。どうやら死んで死神化している状態らしい一護は、普通の魂とは違い、霊圧というものを多めに持っているらしい。

「難しいことはいいからさ、修行つてのを付けてくれよ」

長く続きそうな夜一の話を通り、一護はニヤリと笑った。夜一も顔を引き攣らせつつ、笑みを浮かべる。

「そうじゃな。まずはお前の『戦いの記憶』を呼び覚ます」

「何だ、『戦いの記憶』ってのは……うわっ」

尋ねた瞬間、目前から夜一が消えた。次の瞬間、夜一の手刀が喉に食い込んでいた。

「な、何すんだよ、てめエ……卑怯じゃねーか」

「難しいことはいいんじやろ？記憶を失っても一護、おぬしには本能が眠っている筈じゃ。それを呼び起こすことを『修行』とする」

夜一はまた一瞬の内で一護から数メートル離れ、腕組みをして告げた。

「今日からしばらく、ここで直々に相手をしてやる。死にたくなければせいぜい本能を呼び覚ますことじゃな」

全く目で追えない速度で動く相手。自分にあたえられた浅打ちでどう対応できるのか。だが考えている余裕はない。一護は夜一に向かって駆けていった。

「本能って奴、取り戻してやろうじゃねーか！」

寸前でジャンプして上から切りかかる。だが夜一の姿はそこには無かった。

「ぬるい」

膝を鳩尾に入れられ、あっという間に地面に伏し、上から押さえつけられていた。相手は素手で、女だ。一護は刀を地面に刺し、それを支えにして立ち上がると刀を手に走り出した。

「鬼事では勝てぬぞ一護」

そんなこと言われても、敵うわけがないと心の中で呟く。すると周りの景色が幕が降りた様に消えた。

「退けば老いるぞ、臆せば死ぬぞ」

突然身体中に声が響き、一護は反射的にスピードを緩めた。

「退けば…老いる…臆せば…死ぬ」

その声を反復した途端、一護の脳裏に一人の男が蘇った。

「……あんたは」

其の七、死神（後書き）

毎週ジャンプ買ってますが、

展開についていけないですね（笑）

次の話ではたつきたちも絡んでくるのかな…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5713m/>

BLEACH 死神編

2010年10月11日19時36分発行